

シンポジウム「世界哲学の中の西田幾多郎」 提題要旨

東京大学 朝倉 友海

「論理」という語を多用する西田の哲学が、徹頭徹尾それをめぐる思索の展開として額面通りに受け取られることは少ない。たとえ命題関数を場所的と呼ぶ箇所があっても論理的考察が希薄という印象があるが、思索の起点には彼の言う「純論理派」との対峙があり、晩年の著作でもなお「論理」による数理の基礎づけを試みるなどその姿勢は一貫しており、周知のように場所的論理として彫琢された思想は言語的表現を考察することよりもたらされ、とりわけ述定をめぐる考察により定式化された。そこに顧みるべきものがあるとなれば何なのかを明らかにするために、本発表では中期西田の場所論を中心に「論理」の筋道をたどることでその内実を改めて整理し、述定や推論の働きを一般化することにより「作用」をとらえることが場所的と呼ばれることを確認するとともに、それが直接的には大乘仏教と無関係であることから改めて西田哲学がもつ特徴を論じる。